

# 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

平泉野遺跡・駒形45-4地点

平成31年 3 月

一関市教育委員会

# 序

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺きょうぞうべつとうりょう経蔵別当領であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』あづまかがみによって証明されています。平成17年には国史跡「骨寺村莊園遺跡」ほねでらむらしようえん いせきに指定、18年には国重要文化的景観「一関本寺の農村景観」に選定されています。

さて、骨寺村莊園遺跡と深い関係にある「平泉」は、23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村莊園遺跡」については、24年度に世界遺産暫定一覧表に登載されており、教育委員会では重点的に調査研究を行っています。

本年度は、27年度から継続している「平泉野遺跡」へいせん の いせきの確認調査と、新たに埋蔵文化財包蔵地「骨寺村莊園遺跡」の確認調査を実施しました。本書により調査成果を広く公開し、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

平成31年3月

一関市教育委員会

教育長 小 菅 正 晴







国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図（複製） 原典は中尊寺蔵





国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図（複製） 原典は中尊寺蔵





国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図（複製） 原典は中尊寺蔵





平泉野遺跡（中川 9、若井原 194-1 地点）調査区全景（南西から、無人航空機による空中撮影）



駒形 45-4 地点 3 トレンチ全景



## 例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が平成30年度に行った骨寺村荘園遺跡に係る調査報告書である。
- 2 調査は、国庫補助事業及び県補助事業を活用した。
- 3 調査は、平成7年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』（中尊寺蔵）の現地として、一関市巖美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲及び内容の確認のための発掘調査を実施したものである。
- 4 30年度調査対象地は、骨寺村荘園遺跡の構成要素である「白山社及び駒形根神社」の西側に隣接する「平泉野遺跡」および南東に接する駒形45-4地点である。
- 5 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。
- 6 調査体制は以下のとおり。

教育委員会	文化財課	課長	佐藤 武 生
		文化財係長	坂 本 光 司
		学芸員	菅 原 孝 明
		文化財調査研究員	二階堂 里 絵
- 7 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集、校正は文化財課職員  
の協力を得て菅原孝明が行った。
- 8 土層断面図の土色表示は新版標準土色帳1997年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。
- 9 調査に係る国土座標取り付け業務および無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮  
影は株式会社一測設計に、調査補助及び調査区刈り払い業務は本寺地区地域づくり推進協議会  
に、それぞれ委託した。
- 10 報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会及び同世界遺産推進部会、岩手県教  
育委員会平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導と助言を得ている。また、出土した陶磁器の鑑定  
については、羽柴直人氏（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター主任文化財専  
門員）の、縄文土器の鑑定については、須原拓氏（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化  
財センター文化財専門員）の指導をいただいた。
- 11 調査協力者・機関（敬称略・順不同）  
須原拓、羽柴直人、小巖芳夫、佐々木源輔、佐々木登志也、佐藤勲、佐藤金朗、佐藤弘征、平山  
勇、山川純一、本寺地区地域づくり推進協議会、骨寺村ガイダンス運営協議会、文化庁、岩手県  
教育委員会、平泉町教育委員会、奥州市教育委員会
- 12 本書に係る調査報告会は、平成31年2月11日に骨寺村荘園交流館（若神子亭）で実施した。



# 目 次

序	1
カラー図版	3
例言	7
目次	8
1 位置と環境	9
2 調査に至る経緯	14
3 平泉野遺跡（中川9地点、若井原194-1、194-2）の調査	21
4 駒形45-4地点の調査	29
5 総括	35
遺物観察表	37
写真図版	38
抄録	49

# 1 位置と環境

## 1 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年（2005）9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年（2011）9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km<sup>2</sup>である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（須川岳）を中心とする火山性山岳風景地の国指定「栗駒国定公園」（昭和43年（1968））や北上川水系磐井川流域の国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」（平成17年）および国選定重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年（2006））、下流部には磐井川によって滝或いは急流、深淵となって変化に富んだ溪谷景観をなす国指定名勝及び天然記念物「巖美溪」（昭和2年（1927））がある。市の東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が浸食されてできた国指定名勝「狢鼻溪」（大正14年（1925））がある。

## 2 骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海拔高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海拔230m～260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班（総括：広田純一（岩手大学教授））による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の巖美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底（縦方向）と河岸（横方向）への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、巖美層が交互に出現する理由は、断層活動により巖美層に褶曲が生じているためであるという（土井2012）。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布している。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している（島田2012）。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田a火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物（オモダカ・サジオモダカ属）の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサやソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている（平塚他2012）。ただし十和田a火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかが検討課題となる。年代についてもやはり発掘成果との突合が不可欠である。



### 3 歴史的環境

**中尊寺文書** 骨寺村の中尊寺莊園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光<sup>じざいぼうれんこう</sup>という僧侶が、紺紙金銀字交書一切経<sup>こんしきんぎんじこうしよいつさいきょう</sup>を奉行し、8年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年（1126）三月二十五日、発給者は藤原清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する譲状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」（文保2年（1318）3月）・「骨寺村在家日記」（室町時代か）があり、貢納者と品目が書き出されている。

**吾妻鏡** 文治五年（1189）の奥州合戦で奥州藤原氏は滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮<sup>あんどん</sup>は所領の安堵を求め、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院の祈願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈祷料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。その上で、中尊寺の存続と、合戦により住民が逃げ出した寺領の安堵を求めている。

これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至（村境）を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鑑懸<sup>かぎかけ</sup>、西は山王窟<sup>さんのうのいわや</sup>、南は磐井川<sup>みたけどう</sup>、北は峯山堂（から）馬坂<sup>まさか</sup>である。

**陸奥国骨寺村絵図** 中尊寺大長寿院には2枚の絵図が残されている。簡略絵図（仏神絵図）と呼ばれるもの（カラー図版1）、詳細絵図（在家絵図）と呼ばれるもの（カラー図版2）である。また、詳細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図（カラー図版3）と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天（上）に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領□□境論」「具書」等の文字も確認されている。

これらの絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説（伊藤1957・吉田2008）と裁判の証拠書類説（大石1984）が示されてきたが、紙裏絵図と文字が発見されたことにより（黒田1995）、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

**磐井郡西岩井村絵図（元禄12年（1699））** 磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串村<sup>いづくし</sup>の中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに、「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

**平泉雑記（安永2年（1773））** 平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

**風土記御用書出（安永4年（1775））** 仙台藩が領内の各村から提出させた書出である。その一つである五串村の書出に、本寺は「端郷本寺<sup>はごうほんでら</sup>」として記載され、名所や旧跡等がその由来とともに細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある

「六所明神、小名 若神子」、<sup>わかみ こ</sup>「山王社、小名 山王山」、<sup>ふどうのいわや</sup>「不動窟、小名 真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である「関山風土記」には、<sup>かんざん ふ ど き</sup>慈恵塚が中尊寺一山の惣持である（保持されている）ことが記されている。これらの記載から、本寺（骨寺）が中尊寺の荘園ではなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

#### 4 骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果

骨寺村荘園遺跡からは、縄文時代中期から弥生時代中期までの土器や石器が出土している。21年度調査で逆茂木が残る<sup>おとしあな</sup>陥穴を、22・23年度で楕円形の<sup>おとしあな</sup>陥穴を確認している。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見しており、当該地は狩り場として機能していたことが想定される。また、不動窟でも縄文土器が出土しており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定できる。

28年度調査では、平泉野台地南東部で縄文時代中期中葉の堅穴住居、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落を確認した。また、29年度調査では、平泉野台地北西部で自然堆積層中から縄文時代中期から弥生時代初頭の土器片が出土した。

不動窟では、縄文時代前期と弥生時代中期の土器が出土しているが、窟が利用されていたことを推定するまでには至っていない。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの<sup>はじき す え き</sup>土師器や須恵器である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器碗や須恵器が出土している。同時期とみられる土師器と須恵器は、24年度調査（景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。さらに、味ヶ沢でも同時期の須恵器片が採集されており、どうやらこのあたりから村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として明確ではない。

12世紀に中尊寺経蔵別当領となったことと関係する調査成果もある。<sup>とおにし</sup>遠西遺跡からは、12世紀の<sup>とこなめようさんさんきん こ</sup>常滑窯産三筋壺と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡からは、遺構外ではあるが13世紀中頃～後半の<sup>りゅうせんようけいせいじしのぎれんべんもんわん</sup>龍泉窯系青磁 鎬蓮弁文碗が出土している。これら在家に関わる痕跡は本寺地区の北側丘陵部の裾部に分布し、絵図に描かれた散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中世以来の景観を継承している。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。22年度調査では塚本体および周辺の精査を行った。直径は約10m、最大高は約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似（関根2009）しており、村を見下ろす立地からも経塚である可能性が高い。<sup>おおほりそうま</sup>大堀相馬<sup>ようさん</sup>窯産の土瓶や<sup>せ とうさん とうみょうぐ</sup>瀬戸窯産の燈明具など近世以降の遺物が出土している。

周辺の慈恵大師に関わる石造物は近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から、塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『<sup>ほうない ふ ど き</sup>封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後であることが推定できる。

23年度には不動窟を調査した。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟である。壁面に燈明具を置くための穴が、入口部には貫を通した痕跡が見つかった。おそらくある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。

他の調査成果としては、梅木田遺跡でも掘立柱建物を確認しているが、陶磁器類も出土している。遠西遺跡でも近世と考えられる掘立柱建物が検出されているが、出土遺物が少ないため、年代の推定



が困難である。

以上のことから、骨寺村荘園遺跡は弥生時代以降の一時期を除き、縄文時代から現代まで人々が生活を営んでいた場所であることが想定できる。

(一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「1. 位置と環境」を引用、加筆)



若神子社と田植えを終えた水田

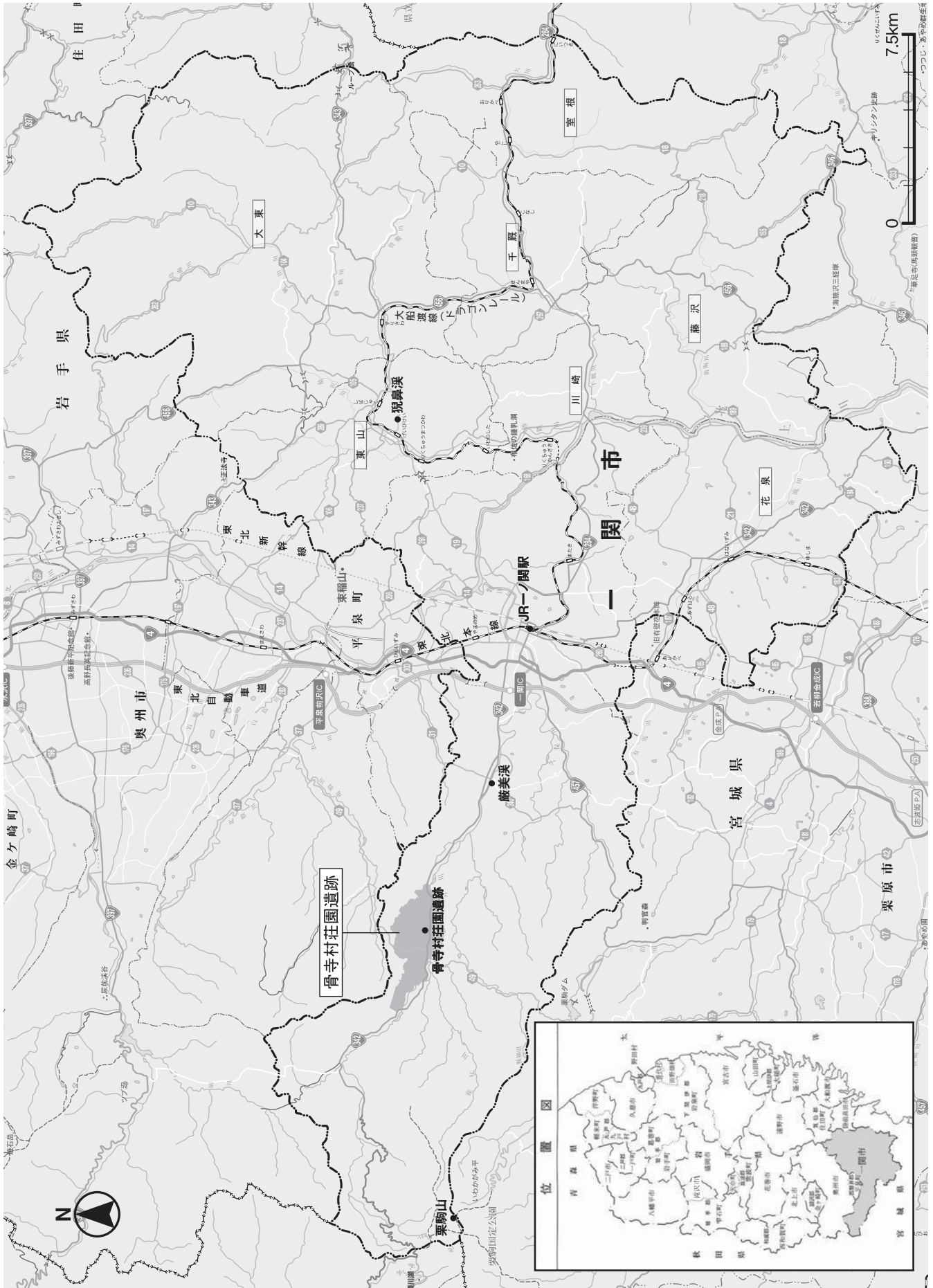


図1 骨寺村荘園位置図



## 2 調査に至る経緯

### (1) 骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み

平成5年2月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成7年4月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成7年度	陸奥国骨寺村調査委員会（委員長、東北学院大学教授大石直正氏）発足 歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成8～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会主体の調査を開始、1/2000ベースマップを作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討
平成13年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡、かわらけ片、常滑三筋壺出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年6月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年8月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会設置
平成16年3月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全・活用、世界遺産登録に向け、集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年3月2日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される 文部科学省告示第22号 (山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂(拝殿))
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年7月28日	本寺地区の平野部を中心とした337.5haが国内2番目の重要文化的景観に選定 文部科学省告示第121号
平成18年9月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉ー浄土世界を基調とする文化的景観」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1確認調査、縄文土器、石器等出土
平成19年8月26～30日	イコモス現地調査
平成20年5月	イコモス「登録延期」を勧告
平成20年6月14日	岩手・宮城内陸地震（マグニチュード7.2）発生。震源地は本寺地区の西方約3km

平成20年 7月	世界遺産委員会で「平泉—浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡（若井原188番外地点）確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、9世紀代の須恵器と土師器出土
平成21年 4月 4日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において、平成23年の世界遺産登録を目指す資産の絞り込みが提案され、世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡、達谷窟の4資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年 1月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界文化遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査および三次元測量の実施、近世地誌類や出土遺物、石造物整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡（若井原194-1地点）確認調査、縄文時代の焚火跡確認
平成22年 9月 8・9日	イコモス現地調査、調査員ワン・リジュン氏（中国イコモス国内委員）
平成23年 3月11日	14時46分頃、マグニチュード9.0の巨大地震発生（震災名：東日本大震災）
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴確認
平成23年 5月	イコモス「登録」を勧告
平成23年 6月29日	世界遺産委員会で「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定 但し、柳之御所遺跡は除く
平成23年11月14日	第1回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年 3月22日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴、十和田 a 火山灰確認 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年 5月18日	第3回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年 9月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」拡張登録に関係者（県教育長、二市一町首長）会議 開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年 1月30日	第4回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に3基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、土地造成と掘立柱建物確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁鎚蓮弁文碗出土
平成25年11月22・23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成26年 1月 7日	第5回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社（中川4、6地点）確認調査、中川4地点の塚の自然科学分析を実施、13世紀後半と推定



	梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29・30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成27年1月6日	第6回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成27年1月26日	本寺地区の一部6.7haが重要文化的景観に追加選定 文部科学省告示第6号
平成27年度	白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け 梅木田遺跡確認調査、17世紀以降の掘立柱建物確認 平泉野遺跡（若井原194-115地点）確認調査、17世紀以降の段切り造成区画確認
平成27年11月14・15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成28年1月5日	第7回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 白山社及び駒形根神社（駒形5、若井原194-1地点）確認調査、縄文土器、住居跡確認 平泉野遺跡（中川9、若井原194-115地点）確認調査、35m以上の溝確認、塚の構築年代を16世紀以降と結論付け 山王窟三次元測量
平成28年8月4～6日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催 （第8回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成28年10月3日	第9回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年12月3・4日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成29年1月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）確認調査、側溝とみられる溝2条、竪穴状遺構確認
平成29年6月22日	第11回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年8月5日	「平泉の文化遺産」国際会議 開催（平成29年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会と位置付け）
平成29年8月6日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催（第12回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成29年9月8日	第13回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年3月7日	第14回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1、194-2地点）確認調査、駒形45-4地点確認調査

## （2）平成30年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成8年度から骨寺村荘園遺跡の調査を始め、11年度から発掘調査を実施している。目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区で、絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。

調査の結果、本寺地区北側の山裾には在家とみられる遺構が多く、その一部から中世の遺物が出土した。そのことは、遺構の時代も中世まで遡ることを示唆している。一方、宗教施設の調査について

は、中世に遡る遺構・遺物の発見には至っていない。村落遺跡としての把握は進んでいるものの、宗教施設の調査では明確な成果を挙げられていないのが現状である。

市教育委員会は、15年から骨寺村荘園遺跡を平泉の文化遺産の一つとして、世界文化遺産への登録を推進してきた。しかし、20年に平泉は登録延期となったため、21年に登録推進の資産候補の絞り込みが提案された。そして、骨寺村荘園遺跡は更なる調査研究が必要と判断され、資産候補から外れ拡張登録を目指すことになったのである。

そのため、市教育委員会は7カ年の発掘調査計画を立て、特に宗教施設に関わる調査を中心に実施してきた。そうした中、23年に「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界文化遺産に登録され、翌24年には、骨寺村荘園遺跡のほか、柳之御所遺跡（平泉町）、達谷窟（平泉町）、白鳥館遺跡（奥州市）、長者ヶ原廃寺跡（奥州市）の5つの拡張予定資産が、世界遺産暫定一覧表に記載された。

これを受け、拡張登録を目指す関係县市町間で25～29年度の5カ年で重点調査を実施することを確認した。この重点調査で成果を積み重ねたが、拡張登録につながる顕著な普遍的価値の証明に至らないとの結論に達し、関係县市町で30年度以降も調査を継続することで合意した。

30年度は、21年度からの発掘調査計画を改定した第2期計画（29～33年度）の2年目にあたる。また上記のとおり関係县市町で調査継続を取り決めており、29年度に引き続き平泉野遺跡の調査を実施した。また、29年度の骨寺村荘園遺跡指導委員会で、平泉野遺跡のある丘陵部だけでなく平野部の調査もするべきとの意見をいただいております、地権者の了解を得て駒形45-4地点の調査を実施した。

これまで（11～30年度）調査した地点を図2-1、図2-2、表1に示した。

（一関市教育委員会2018『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「2 調査に至る経緯」を引用、加筆）  
（菅原）



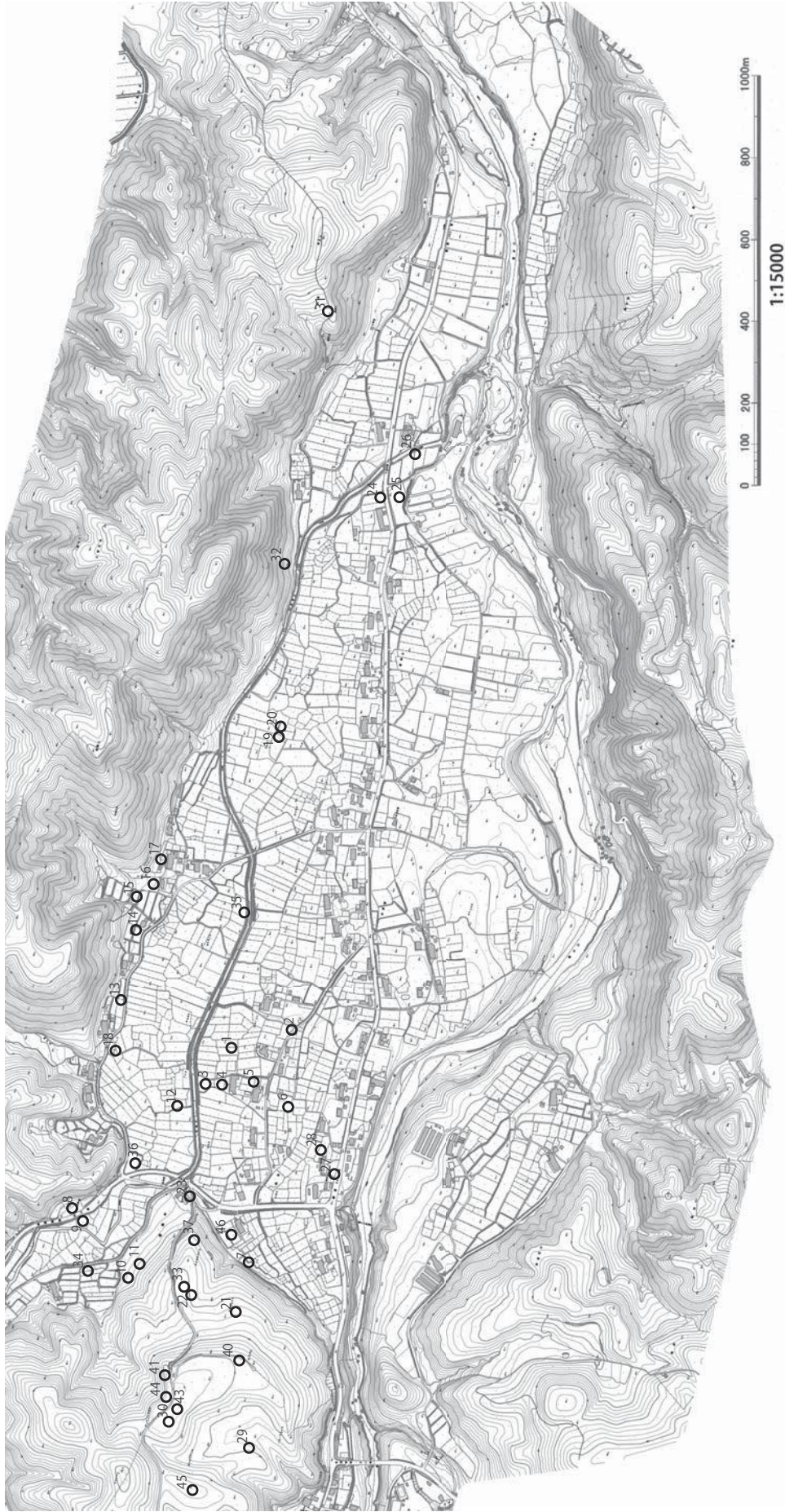


図2-1 骨寺村莊園遺跡における既調査地点(1)



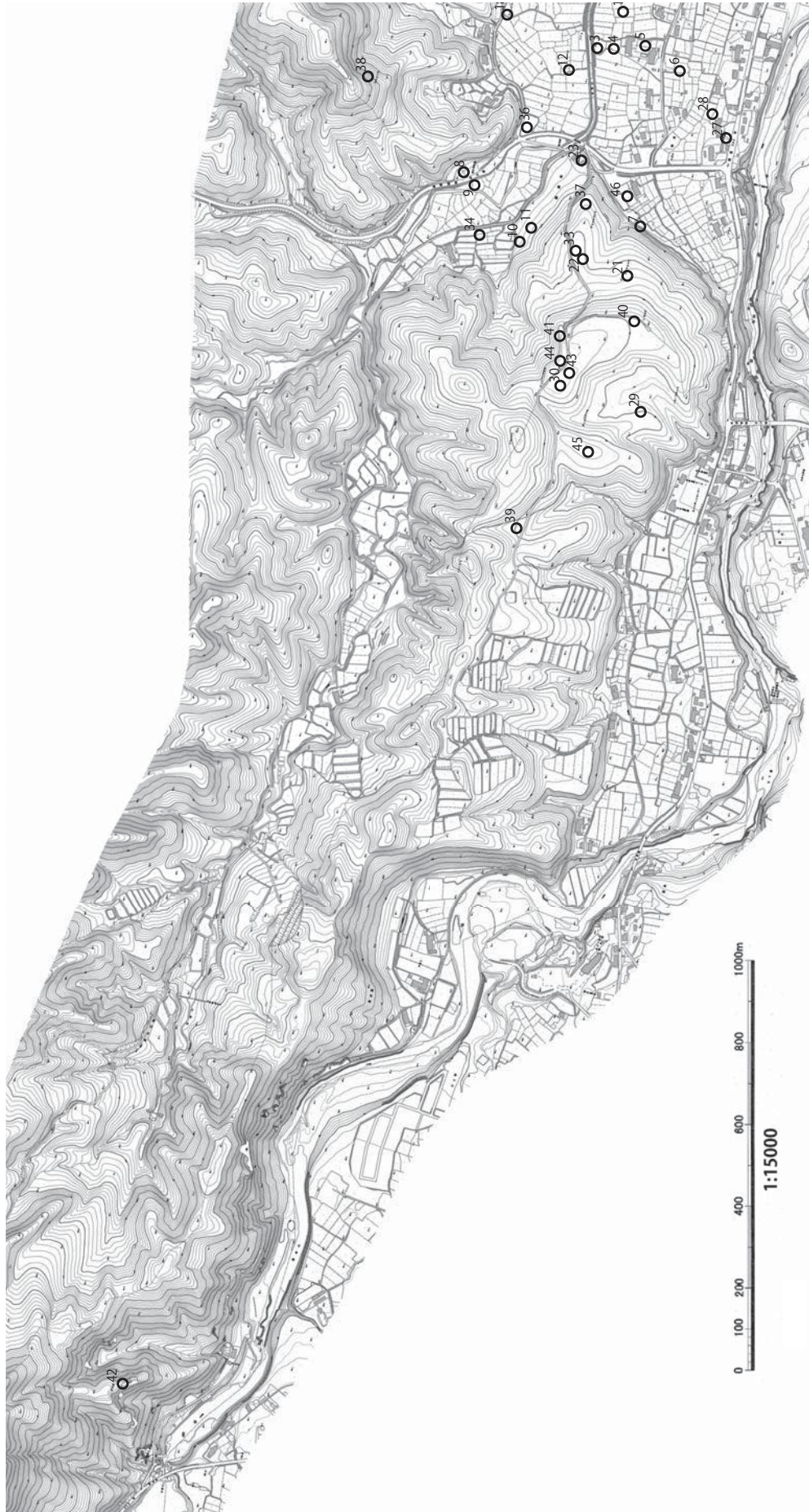


図 2 - 2 骨寺村荘園遺跡における既調査地点(2)



番号	調査地	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度
2	沖要害72、77、本寺中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度
4	駒形86	小穴	平成11年度
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度
6	駒形96-1、107-1	なし	平成11年度
7	駒形40-2、44	なし	平成11年度
8	中川32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器	平成12・25～27年度
9	中川28-1、35	なし	平成12年度
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器	平成12・25～27年度
11	中川4	塚	平成25・26年度
12	要害141-4、146-3	なし	平成12年度
13	要害118、119	なし	平成13年度
14	要害79-1、114-1、115-21、遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝、柱根、常滑三筋壺、かわらけ	平成13・14年度
15	要害70、72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成14年度
16	要害69-1	なし	平成13年度
17	要害23、54-1	近世板蔵基礎	平成13年度
18	要害127-2	なし	平成14年度
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度
20	若神子43、45、46	なし	平成16年度
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯跡	平成17年度
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石匙	平成17年度
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石鏃、銭	平成18年度
24	若神子85-3、87-1、90-4、92-2	なし	平成18年度
25	若神子88-1	なし	平成18年度
26	若神子81、86-1、86-4	なし	平成18年度
27	駒形153-1	なし	平成19年度
28	駒形151-1	溝、縄文土器、石器	平成19年度
29	若井原188、194-35、194-36、平泉野遺跡	陥穴、旧流路、縄文土器、石器、土師器、須恵器	平成21年度
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焚火跡、縄文土器、石器剥片	平成22年度
31	下真坂25-5、慈恵塚	近世陶磁器、近世銭	平成22年度
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器、弥生土器、石器剥片、近世銭	平成23～25年度
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器、石器	平成23年度
34	中川19-1	土坑、縄文土器、石器	平成20年度
35	要害59-1	小穴	平成20年度
36	要害194-1、194-2	柱穴、土師器、須恵器	平成23・24年度
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	陥穴、縄文土器、石器剥片	平成24年度
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度
39	若井原194-115、平泉野遺跡	近世磁器、縄文土器	平成27・28年度
40	若井原194-1、駒形5、白山社及び駒形根神社	竪穴住居、土坑、溝、縄文土器、土偶、石器、近世陶磁器	平成28年度
41	中川9、平泉野遺跡	道路遺構	平成28・29年度
42	若井原194-33、山王窟	近世石造物	平成28年度
43	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴状遺構、縄文土器、弥生土器	平成29・30年度
44	中川9、平泉野遺跡	土坑、縄文土器、石器、陶器	平成30年度
45	若井原194-2、平泉野遺跡	溝	平成30年度
46	駒形45-4	土坑、柱穴、土師器、陶磁器	平成30年度

※番号は図2-1、図2-2と対応

表1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点一覧表

### 3 平泉野遺跡（中川9地点、若井原194-1、194-2地点）の調査

調査地点は、平泉野台地と呼ばれる丘陵の南東部にある南側に張り出した2つの大きな平場の山林である。それぞれ駒形根神社から西約550m、西約750mの地点で、一関市巖美町字中川9、字若井原194-1、194-2に所在する（図4）。『陸奥国骨寺村絵図』には、これらの付近とみられる部分に「骨寺（堂）跡」が描かれている。本調査は、遺構の有無、特に「骨寺（堂）跡」の痕跡を確認するために実施した。

現地での調査期間は平成30年6月26日から11月26日、調査面積は386m<sup>2</sup>である。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基 H28-15 X = -113496.133、Y = +9516.690、H = 233.055

基 H28-16 X = -113449.703、Y = +9485.911、H = 232.862

基 H30-2 X = -113471.171、Y = +9349.725、H = 233.923

基 H30-3 X = -113526.949、Y = +9330.999、H = 235.762

#### 1 中川9、若井原194-1地点の調査

平成29年度調査において、本地点の約70m東（29年度1トレンチ）で、駒形根神社から西に向かう林道の北側に沿うように東西に走る道路遺構とみられる2本の溝および整地層を確認している（一関市教育委員会2018）。本調査では、その延長の有無を確認するため、樹木を伐採、刈り払いの後、林道に接して南北に1ヶ所ずつ平行する位置にトレンチを設定し、南側（若井原194-1地点）を1トレンチ、北側（中川9地点）を2トレンチとした（図4・5）。1トレンチは29年度に調査した部分（28年度4トレンチ）を拡張して継続調査したものである。重機で表土を除去してその下の遺構を確認した後、人力で掘削を行った。

##### （1）基本土層

**I層** 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。現表土。（図6-1層）

**II層** 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。表土。（図6-2層）

**III層** 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややあり。29年度調査で近世磁器が出土した（一関市教育委員会2018）。（図6-12層）

**IV層** 炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。自然堆積の様相である。29年度調査で、部分的ではあるが上位に2次堆積によるものとみられる十和田a火山灰の小塊を確認している。また、縄文土器、弥生土器が出土した（一関市教育委員会2018）。遺構の確認はこの層の上面で行い、これ以下の層については、一部で深掘りを行い土層断面を観察するに留めた。（図6-8層）

**V層** 10YR5/6黄褐色粘性シルト。硬くしまり強い。無遺物層。地山。（図6-7層）

##### （2）遺構

道路遺構になるとみられる溝や整地層は確認できなかった。林道の直西には造成攪乱層があり（図6-6層）、これにより遺構が失われた可能性もある。

**竪穴状遺構3**（図5、写真図版4） 1トレンチの南東部、基本土層IV層上面で確認した。29年度調査で東部を掘削しており、貼床層および柱穴の可能性のあるピットを9基確認している。ピットの多



くが壁際にある点が特徴的であった（一関市教育委員会2018）。本調査で北西部を確認し、全体形が明らかになった。南北約5.5m、東西約6.5mのやや歪んだ長方形で、カマドはない。29年度調査では、埋土上層から縄文土器1点が出土し、貼床層中に2次堆積によるものとみられる十和田a火山灰の小塊を確認したことから、10世紀以降に構築されたものと考えられる。

**土坑2**（図5・6、写真図版4） 2トレンチの南東部で確認し、その北半を掘削した。遺構上面を根の痕跡とみられる土に攪乱されているが、基本土層V層上面から掘り込まれている可能性が高い。直径約1.7mでその南半は調査区外にあるが、全体形は円形になるとみられる。深さは最大で確認面から0.4mで、壁はほぼ直に立ち上がり、東側の壁はわずかに内傾する。

埋土から縄文土器8点、石器剥片1点が出土した。縄文土器には広範囲にコゲが付着しているものがあり、ほとんど磨滅していない。出土遺物と遺構の形状から、縄文時代のフラスコ状土坑の可能性はある。

**土坑3**（図5・6、写真図版4） 1トレンチの北西部、基本土層IV層上面で確認し、その東半を掘削した。直径約2.2mでその西半は調査区外にあるが、全体形は円形になるとみられる。深さは最大で確認面から0.25mで、壁は緩やかに立ち上がる。

他遺構との重複関係はない。埋土から縄文土器1点が出土した。縄文土器は小片で磨滅が激しい。遺構が掘り込まれている基本土層IV層中に、2次堆積によるものとみられる十和田a火山灰の小塊が29年度調査で確認されていることから、10世紀以降に構築されたものと考えられる。

**(3) 出土遺物**（図3、写真図版4-5・6）

縄文時代の土器76点、石器1点、石器剥片6点、陶器1点の合計84点が出土した。土坑2から縄文土器8点、石器剥片1点、土坑3から縄文土器1点が出土した他は、全て遺構外からである。

出土遺物のうち主要なものを抽出し、遺物観察表（表2）に掲載した。石器1点、縄文土器2点を図示した。

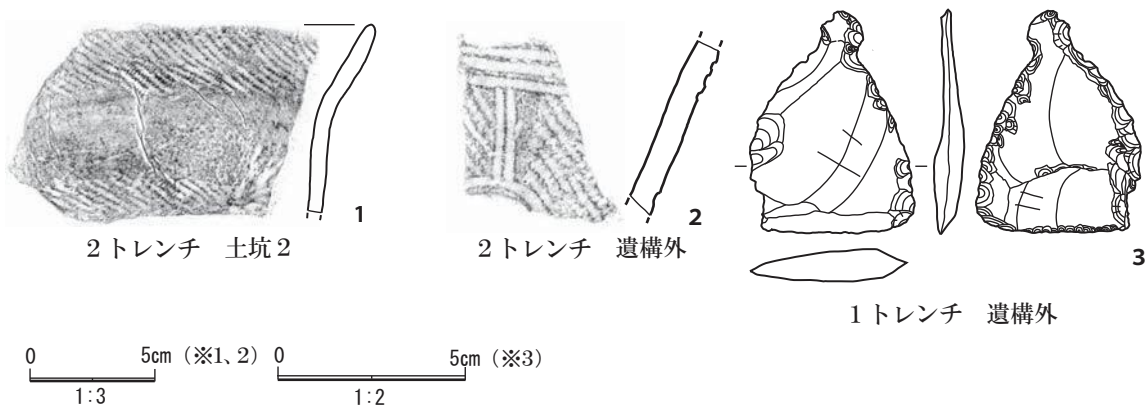


図3 出土遺物

## 2 若井原194-2地点の調査

本地点の直北にある丘陵頂部は地元では「ドウジヤマ」と呼ばれ、『陸奥国骨寺村絵図』簡略図で「骨寺（堂）跡」と並び記されている「堂山」である可能性がある。また、平成26年度踏査で当地点の平場北東部に周囲より一段高い地形を確認しており、何らかの遺構である可能性が考えられた（一関市教育委員会2015）。この地形は、東西約7m、南北約22mの概ね長方形で、周囲との比高差は最も高い部分で約1mある。

樹木を伐採、刈り払いの後、高まりの地形を横断するようにトレンチを設定し、3トレンチとした（図4・7）。人力で表土を除去してその下の遺構を確認した後、一部に深掘りを行い、土層断面を観察した。

### （1）基本土層

**I層** 10YR3/4暗褐色シルトに地山粒が均一に微量混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。現表土。（図8-1層）

**II層** 10YR5/8黄褐色粘土。軽石とみられる岩石塊が所々に入る。硬くしまる。地山。（図8-3層）

### （2）遺構

深掘り部の土層観察の結果、高まりの地形部分に複数積み重なる堆積層を確認したが（図8-6～10層、写真図版6-1・2）、全て自然堆積とみられる。また、その東端は表土上面から大きく削られており（図8-13層）、これによりやや壇状とも見える地形となったものであることがわかった。

**溝1**（図7、写真図版6） 3トレンチの北東部、基本土層II層上面で確認した。南北に0.5mを確認したが、調査区外の北側にさらに延びるとみられる。上幅0.4m、深さ0.27m、断面は椀形である。

他遺構との重複関係はない。遺物は出土せず、年代、性格は不明である。

### （3）出土遺物

縄文時代の土器4点が出土した。全て調査区東端の遺構外からである。縄文土器はいずれも小片で磨滅が激しいが、縄文時代後期頃のものと思われる。

## まとめ

調査の結果、中川9、若井原194-1地点では、29年度調査で確認した道路遺構とみられる溝や整地層の延長を確認できなかった。ただし、林道造成時の削平により失われた可能性もあるため、他地点でさらに確認調査を行う必要がある。

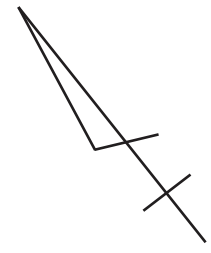
若井原194-2地点では、26年度踏査で確認した高まりの地形部分を調査したが、これは遺構ではないことを確認した。

『陸奥国骨寺村絵図』にある「骨寺（堂）跡」等の痕跡を確認することはできなかった。

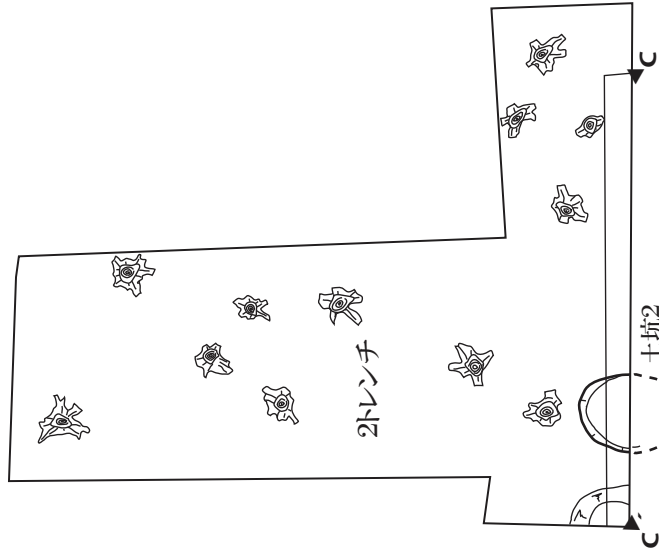
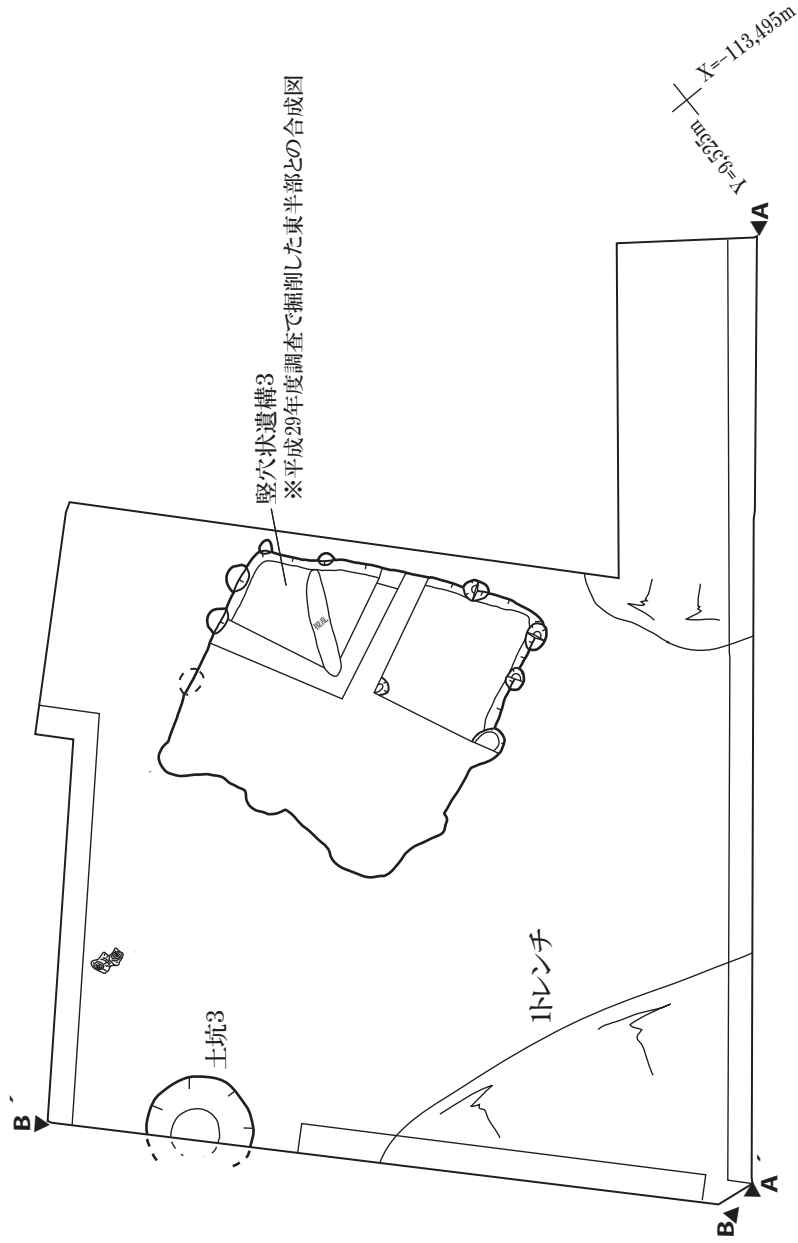
（二階堂）





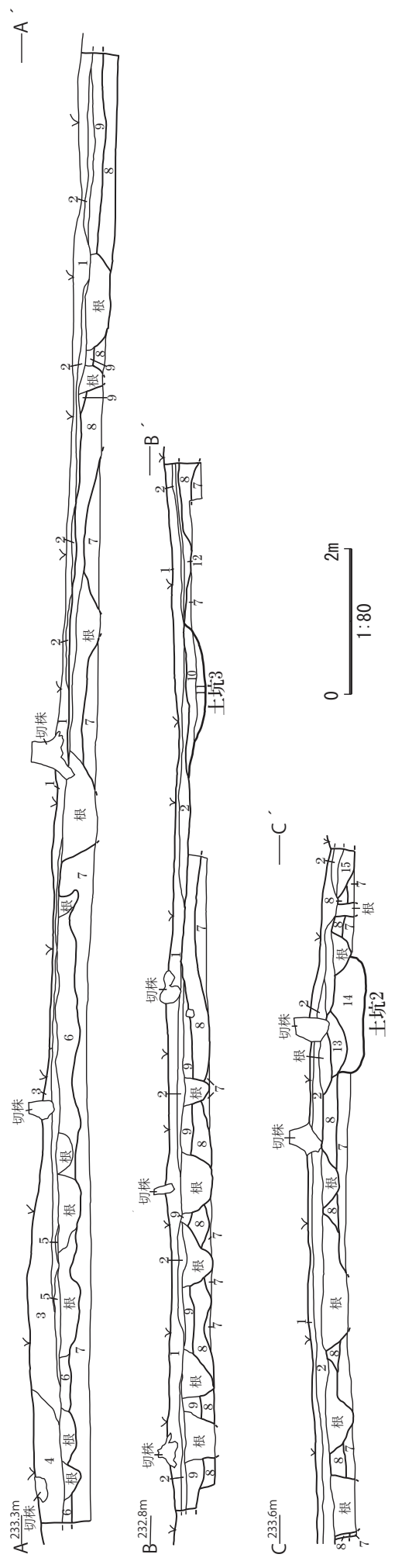


Y=9500m  
X=-113,495m



0 4m  
1:160

図5 中川9、若井原194-1地点 遺構平面図



土層注記

- 1 10YR3/2黒褐色シルト。草の根多く入る。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。現表土層。基本土層Ⅰ層。
- 2 10YR3/3暗褐色シルト。草の根多く入る。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。表土層。基本土層Ⅱ層。
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややあり。草の根が多く入る。表土層。
- 4 砂利。
- 5 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりややあり。表土層。
- 6 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が均一に30~40%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりややあり。造成攪乱層か。
- 7 10YR5/6黄褐色粘性シルト。硬くしまり強い。無遺物層。地山。基本土層Ⅴ層。
- 8 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。自然堆積の礫相である。部分的にはあるが上位に2次堆積によるものとみられる灰白色火山灰の小塊を確認した。縄文土器、弥生土器が出土する。基本土層Ⅳ層。
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。地山塊が入る部分あり。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑3の埋土層。自然堆積層。
- 10 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に5~10%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑3の埋土層。
- 11 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm大)が均一に40~50%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑3の埋土下層。
- 12 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりややあり。近世磁器が出土した。基本土層Ⅲ層。
- 13 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊が均一に微量混じる。灰白色火山灰とみられる小塊を微量含む。炭化物、焼土粒を多量に含む。粘性あり。しまりあり。
- 14 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm大)が均一に3~5%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑2の埋土。
- 15 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊が均一に微量混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。

図6 中川9、若井原194-1地点 土層断面図



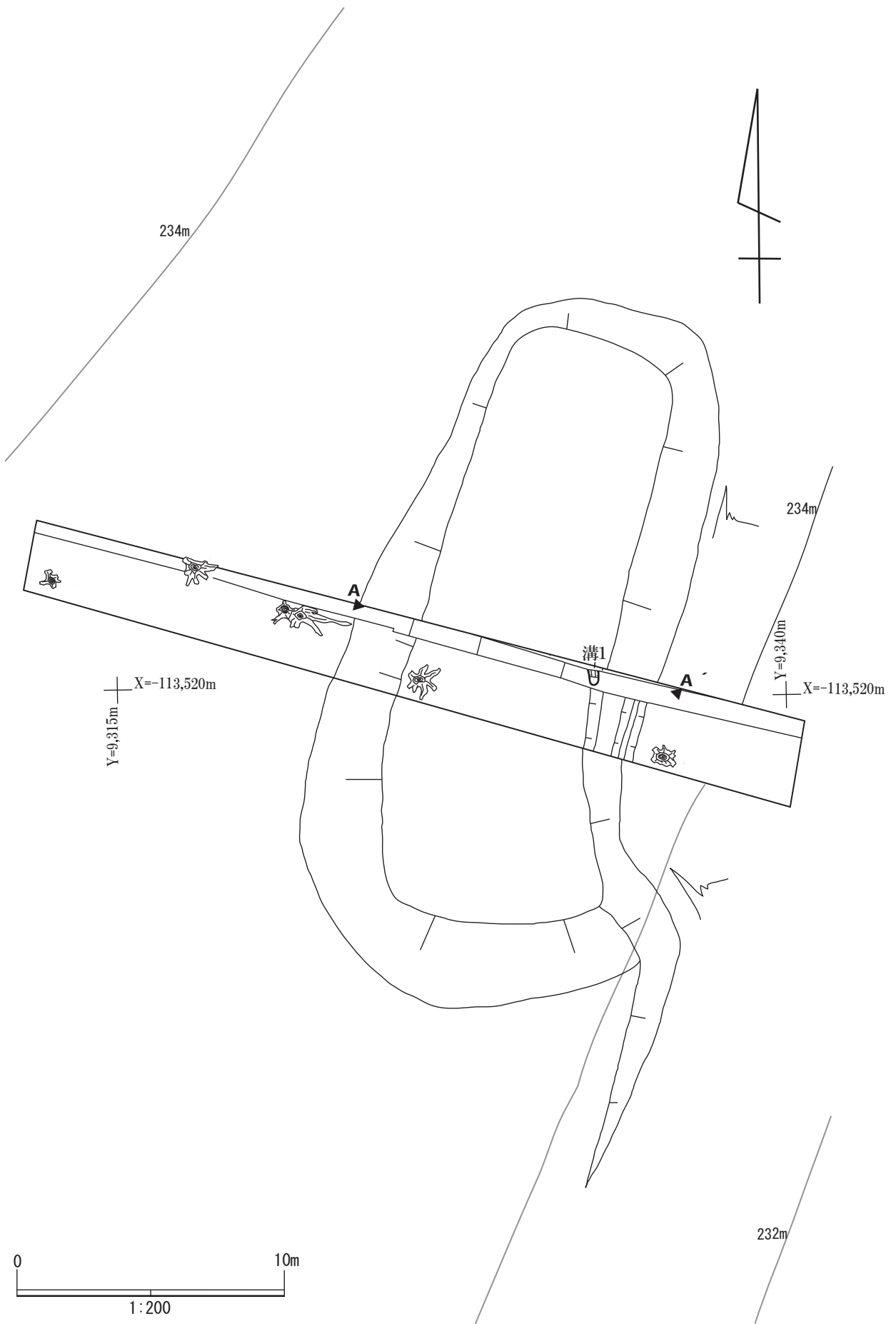
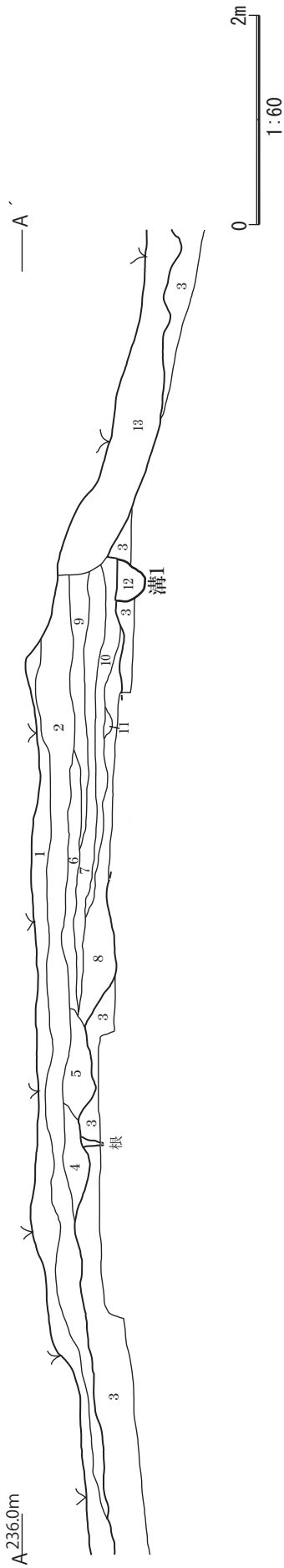


图7 若井原 194-2 地点 遺構平面图



土層注記

- 1 10YR3/4暗褐色シルトに地山粒が均一に微量混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。現表土層。基本土層 I 層。
- 2 10YR4/4褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。
- 3 10YR5/8黄褐色粘土。軽石とみられる岩石塊が所々に入る。硬くまる。地山層。基本土層 II 層。
- 4 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm)が均一に5~10%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりややあり。根の痕跡か。
- 5 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm)が均一に20~30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりややあり。根の痕跡か。
- 6 10YR3/4暗褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 7 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm)が均一に少量混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 8 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm)が均一に30~40%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 9 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm)が均一に30~40%混じる。岩石の粒を多量に含む。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。
- 10 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~5.0cm)が均一に20~30%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 11 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~3.0cm)が均一に20~30%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 12 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5~2.0cm)が均一に微量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。溝1の埋土。
- 13 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5~10.0cm)が均一に30~40%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。

図 8 若井原 194-2 地点 土層断面図

## 4 駒形45-4地点の調査

調査地点は、駒形根神社の南西約150mにあり、一関市巖美町字駒形45-4に所在する(図4・9)。平泉野台地の丘陵の南東山裾が南東に張り出した地形で、段々の水田となっており、その東側の水田はもとは低湿地であったという。駒形根神社の別当家である平山家の屋敷の裏手で、屋号は「テラサキ」であり、丘陵斜面は「テラサキヤマ」「テラサキウシロ」と呼ばれている。屋敷地の北端には「お明神様」の石祠が3基祀られ、北西隅付近には元禄2年(1689)の墓標が建つ(図9、写真図版7)。墓標には「元禄二年」「浄岩禅定門」「六月九日 平兵衛子」「七〇立之」の文字が読み取れ、本寺地区で年号が確認できる最古の石造物である。

「テラサキ」は、『陸奥国骨寺村絵図』簡略図で「骨寺跡」や「白山」の文字と礎石らしき丸印のある丘陵の左(南)の山裾あたりに記されている「寺崎」である可能性がある。本調査は、遺構の有無、特に「骨寺(堂)跡」の痕跡を確認するために実施した。

現地での調査期間は平成30年10月18日から11月26日、調査面積は177m<sup>2</sup>である。

稲の収穫後、水田1枚に1ヶ所ずつ、計3ヶ所のトレンチを設定した。重機で表土および攪乱層を除去してその下の遺構を確認した後、人力で掘削を行った。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基H28-14 X = -113645.925、Y = +9955.506、H = 178.142

基H28-15 X = -113612.614、Y = +9931.297、H = 179.599

### (1) 基本土層

**I層** 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりなし。水田耕作土。(図11-1層)

**II層** 10YR3/3暗褐色シルトににぶい黄褐色シルト塊(径0.5~5.0cm大)が均一に微量混じる。鉄分を多量に含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりなし。水田の鉄分集積土。(図11-2層)

**III層** 10YR6/4にぶい黄褐色シルトが主体で黒褐色シルト塊が所々に混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。北側丘陵上方からの崩壊土層か。遺構の確認はこの層の上面で行い、これ以下の層については、一部で深掘りを行い土層断面を観察するに留めた。(図11-16層)

**IV層** 10YR5/6黄褐色粘土。硬くしまる。地山。(図11-11層)

### (2) 遺構

調査地点は、地権者からの聞き取りによると、もとは緩斜面の畑であったものを昭和30年代に段切り造成して水田とした、ということである。各トレンチの端部で深掘りを行い土層断面を観察したところ、水田の土である基本土層I・II層の下に昭和時代の造成層とみられる層(図11-5・25・33・38・39層)があったが、標高が低い1・2トレンチではその下に畑の耕作土とみられる層(図11-6・7層)が残存していた。さらにその下、地山である基本土層IV層との間には自然堆積とみられる複数の層を確認した(図11-9・10・16~19・22~24・31・32層)。これらの層には礫が多く入る層があり、また一様に砂質分が多いことから、水流による自然堆積が繰り返されたものとみられる。北側丘陵上方からの崩壊土層とみられる基本土層III層は全てのトレンチに広がり、その上面は緩斜面となっている。これ以下の層から遺物は出土せず、それぞれの堆積年代については不明である。図11-9・16・17・18層から土壌サンプルを採取しており、今後自然科学分析を行い、堆積年代の推定を試



みる予定である。

**柱穴群**（図10・11、写真図版11） 3トレンチの中央付近、基本土層Ⅲ層上面で掘立柱建物の柱穴になるとみられるピットを3基確認した。全て円形で直径は0.3～0.4m、確認面からの深さは最も深いもので0.5mある。P1の底面には平らな石があり、P2の埋土には多数の礫が入っていた。P3では柱痕跡を確認した。

他遺構との重複関係はない。遺物は出土せず、年代、性格は不明である。

**土坑1**（図10・11、写真図版11） 3トレンチの東端、Ⅳ層上面で確認し、その西半を掘削した。南北1.5m、東西0.6m以上で、その東半は調査区外にあるが、全体形は方形になるものとみられる。深さは検出面から0.9m以上あり、壁は急に立ち上がる。

他遺構との重複関係はない。遺物は出土せず、年代、性格は不明である。

**土坑2**（図10・11、写真図版11） 3トレンチの東端、Ⅳ層上面で確認し、その西半を掘削した。南北2m、東西1.5m以上で、その東半は調査区外にあるが、全体形は方形か長方形になるものとみられる。深さは最大で検出面から1.7mで、壁は緩やかに立ち上がる。

他遺構との重複関係はない。遺物は出土せず、年代、性格は不明である。

### （3）出土遺物（写真図版11-8）

平安時代の土師器2点、石器1点、石器剥片2点、磁器3点、陶器1点の合計9点が出土した。全て遺構外からである。土師器2点は甕の破片で9・10世紀のものと思われる。

出土遺物のうち主要なものを抽出し、遺物観察表（表2）に掲載した。

### まとめ

本調査では、北側丘陵上方からの崩壊土層とみられる基本土層Ⅲ層の上面で、年代不明の柱穴群、土坑2基を確認した。3トレンチの東側の水田は昭和時代以前より低湿地であったといい、遺構が広がるとすれば西側になるとみられる。今後、土層の堆積年代を確認した上で、さらに周辺を調査する必要がある。

また、遺構外からではあるが、9・10世紀頃のものと思われる土師器甕片が出土した。骨寺村荘園遺跡において、この年代の遺物量は少ないが、他に要害194-1、194-2地点（図2-1-36）および若井原188地点（図2-2-29）の2地点で出土している。花粉分析からも10世紀頃から本格的な稲作が始まったとみられており（平塚他2012）、骨寺村の開発の始まりを考える上で重要な遺物である。村の開発については、はじめに「古代的共同体」による開発、後に「天台『聖』」による開発の二段階があったと考えられている（大石1984、吉田1989、入間田2016）。広田純一氏、菅原麻美氏は、岩手大学による本寺地区の田越し灌漑調査の結果から『陸奥国骨寺村絵図』（詳細図）に描かれた水田を現地比定した。そのうち、古段階に開発された可能性が高い水田のひとつとして、本調査地点から北東約100mにある地点を挙げている（広田・菅原2018）。本調査で出土した土師器甕片は、周辺に骨寺村の初期の開発に関わった人々の生活痕跡が存在する可能性を示唆している。

（二階堂）

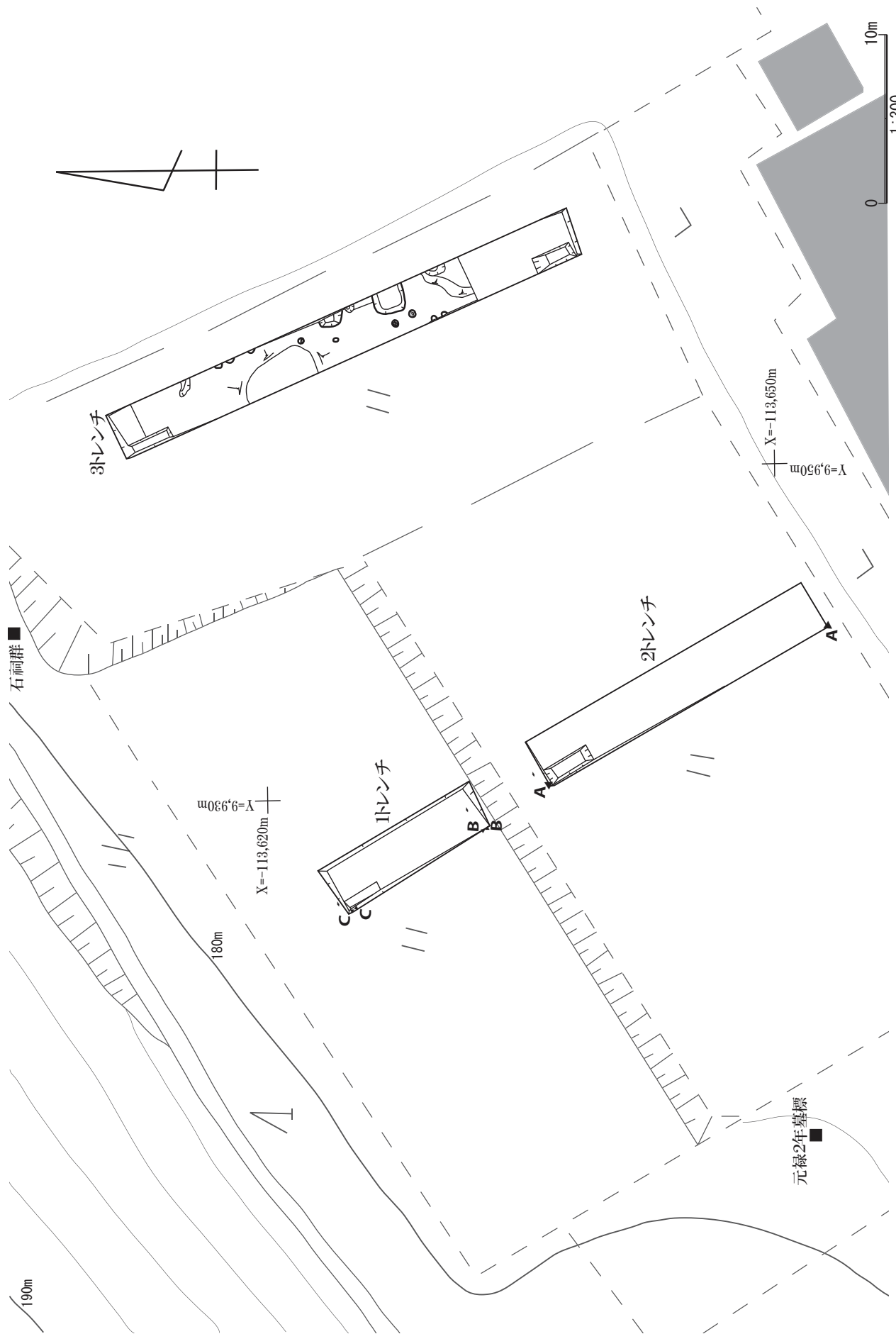


図9 駒形45-4 地点調査区位置図

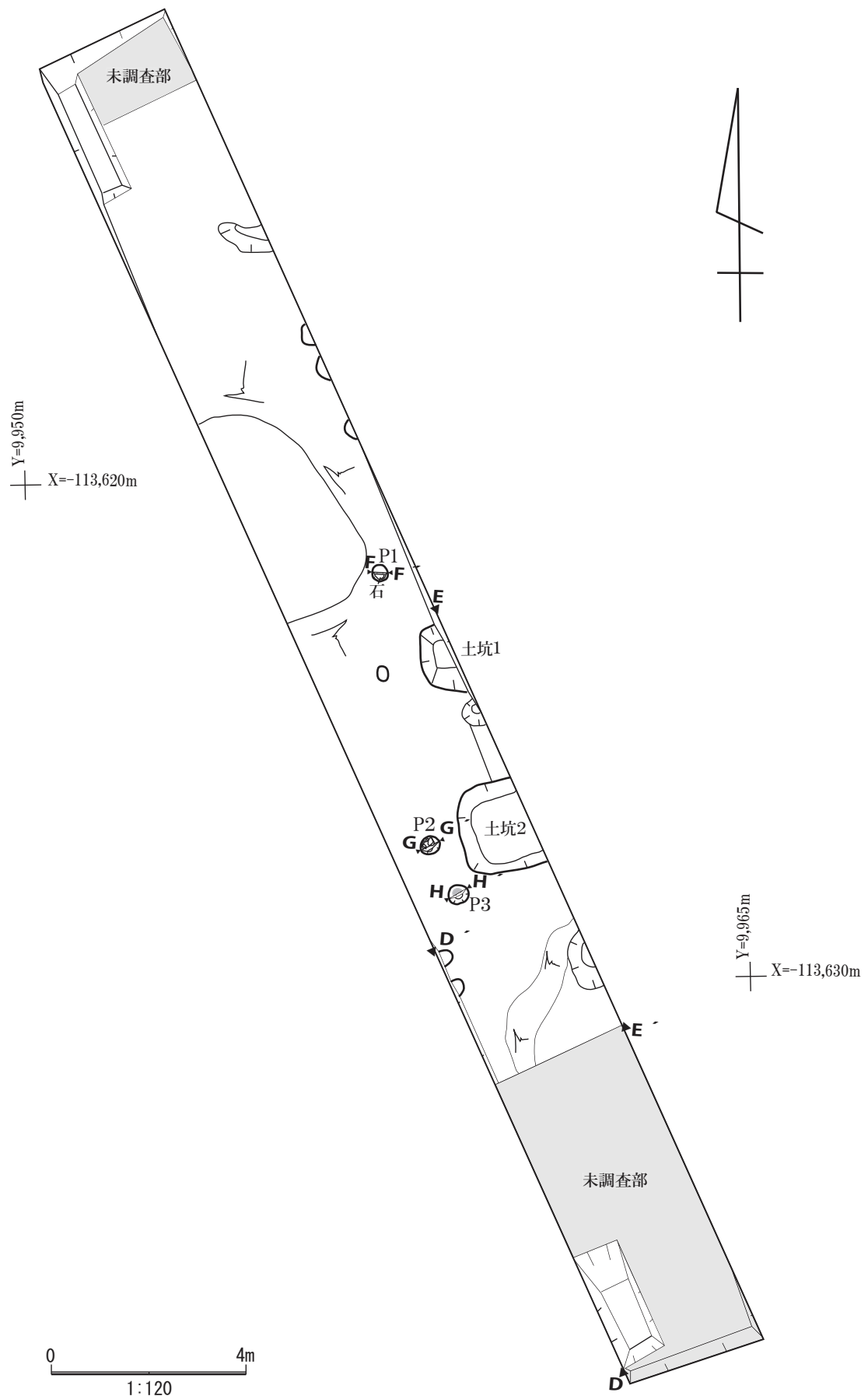


図10 駒形45-4地点 3トレンチ遺構平面図



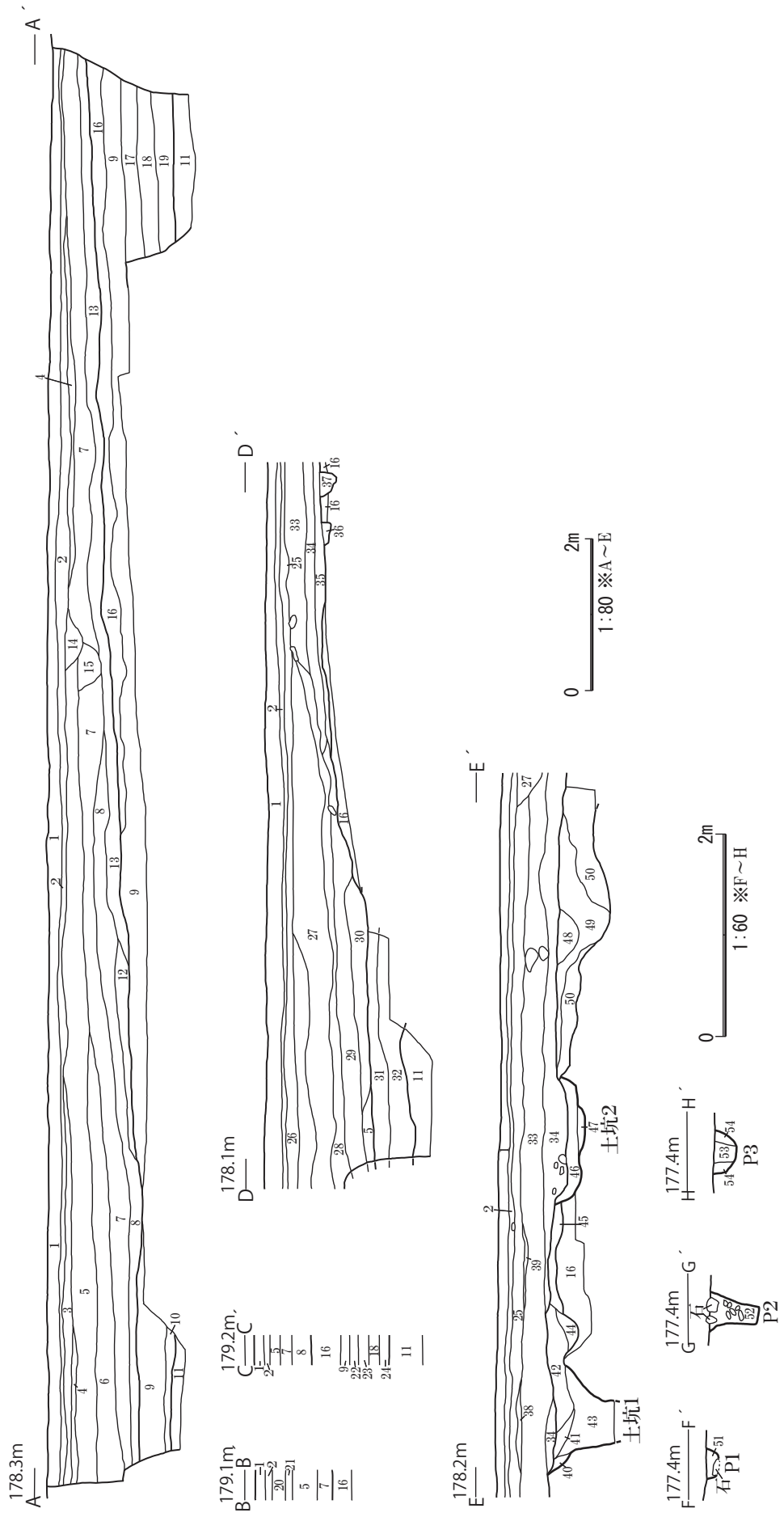


图 11 駒形 45-4 地点 土层断面图

- 1 10YR3/3暗褐色シルト。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりなし。水田耕作土。基本土層Ⅰ層。
- 2 10YR3/3暗褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～4.0cm大)が均一に微量混じる。鉄分を多量に含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりなし。水田の鉄分集積層。基本土層Ⅱ層。
- 3 10YR2/2黒褐色粘性シルトに褐色粘性シルト塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を微量含む。しまりややあり。
- 4 10YR2/1黒色粘土ににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～3.0cm大)が均一に微量混じる。砂質分を含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりややあり。
- 5 10YR3/2黒褐色粘性シルト。岩石の粒を少量含む。炭化物を微量含む。しまりあり。ガラス片が出土。昭和の造成攪乱層か。
- 6 10YR2/1黒色粘性シルト。炭化物を微量含む。しまりややあり。ガラス片が出土。畑の耕作土か。
- 7 10YR2/2黒褐色粘性シルトに褐色シルト塊が所々にまとまって入る。小礫、岩石の粒を少量含む。炭化物を微量含む。しまりあり。ガラス片が出土。
- 8 10YR2/3黒褐色粘性シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～10.0cm大)が一部にまとまって少量混じる。砂質分を多く含む。岩石の粒を多量に含む。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 9 10YR2/1黒色粘土。岩石の粒を微量含む。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 10 10YR3/2黒褐色粘土に地山塊(径0.5～10.0cm大)が均一に10～20%混じる。しまりあり。地山漸移層か。
- 11 10YR5/6黄褐色粘土。硬くしまる。地山。基本土層Ⅳ層。
- 12 10YR6/4にぶい黄橙色シルト塊が主体で黒褐色シルトが所々に30～40%混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。北側丘陵上方からの崩壊土層か。
- 13 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～10.0cm大)が均一に少量混じる。砂質分を多く含む。小礫、岩石の粒を多量に含む。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 14 10YR3/2黒褐色粘性シルト。岩石の粒を少量含む。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 15 10YR2/3黒褐色粘性シルトに褐色シルト塊が所々にまとまって入る。小礫、岩石の粒を少量含む。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 16 10YR6/4にぶい黄橙色シルト塊が主体で黒褐色シルト塊が所々に混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。北側丘陵上方からの崩壊土層か。基本土層Ⅲ層。
- 17 10YR6/4にぶい黄橙色シルト塊が主体で黒褐色シルトが均一に10～20%混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 18 10YR2/1黒色粘土。砂質分を含む。しまりあり。
- 19 10YR4/3にぶい黄褐色粘性シルト。砂質分を含む。岩石の粒が入る。しまりあり。
- 20 10YR3/1黒褐色粘性シルト。砂質分を含む。炭化物を微量含む。しまりややあり。
- 21 10YR3/2黒褐色粘性シルトに暗褐色シルトが均一に30～40%混じる。砂質分を含む。炭化物を微量含む。しまりややあり。
- 22 10YR2/1黒色粘土。岩石の粒を微量含む。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 23 10YR6/4にぶい黄橙色シルト塊が主体で黒褐色シルトが均一に10～20%混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 24 10YR4/3にぶい黄褐色粘性シルト。大小の礫が多数入る。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 25 10YR3/4暗褐色～黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～5.0cm大)が均一に30～40%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりややあり。昭和年代の造成攪乱層。
- 26 10YR2/1黒色粘土。大小の礫が入る。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 27 10YR2/2黒褐色粘土。大小の礫が少数入る。炭化物を微量含む。しまりややあり。ガラス片が出土。
- 28 10YR2/1黒色粘土。下面に鉄分が集中する。炭化物を微量含む。しまりややあり。ビー玉が出土。
- 29 10YR1.7/1黒色粘性シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～5.0cm大)が一部にまとまって少量混じる。砂質分を多く含む。大小の礫が一部に入る。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 30 10YR5/4にぶい黄褐色シルト塊に黒褐色シルトが少量混じる。大小の礫が多数入る。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 31 10YR3/2黒褐色粘土。大小の礫が多数入る。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 32 10YR4/3にぶい黄褐色粘性シルト。大小の礫が多数入る。炭化物を微量含む。しまりあり。
- 33 10YR3/3暗褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～10.0cm大)が所々にまとまって混じる。大小の礫が多量に入る。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりややあり。昭和年代の造成攪乱層。
- 34 10YR3/3暗褐色シルト。大小の礫が一部に入る。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりなし。昭和年代の造成攪乱層か。
- 35 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～3.0cm大)が均一に微量混じる。砂質分を多く含む。鉄分を多量に含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりややあり。
- 36 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～2.0cm大)が下部に微量混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 37 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～3.0cm大)が均一に少量混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 38 10YR3/4暗褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～5.0cm大)が均一に40～50%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりややあり。昭和年代の造成攪乱層。
- 39 10YR3/4暗褐色シルトに黒褐色シルトが筋状に一部に混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりややあり。昭和年代の造成攪乱層。
- 40 10YR3/4暗褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～10.0cm大)が均一に40～50%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の壁の崩壊層か。
- 41 10YR3/3暗褐色シルト。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の上層。
- 42 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～3.0cm大)が一部に少量混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 43 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～5.0cm大)が均一に30～40%混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の下層。
- 44 10YR3/4暗褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 45 10YR6/4にぶい黄橙色シルト塊が主体で黒褐色シルトが上部に多く混じる。砂質分を多く含む。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりややあり。
- 46 10YR3/2黒褐色シルト。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。土坑2の上層。
- 47 10YR6/4にぶい黄橙色シルト塊(径0.5～10.0cm大)が主体で黒褐色シルトが少量混じる。砂質分を多く含む。鉄分を多量に含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。
- 48 10YR3/3暗褐色シルト。鉄分が集中する部分あり。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりややなし。
- 49 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～3.0cm大)が均一に微量混じる。砂質分を多く含む。鉄分を多量に含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりややあり。
- 50 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～10.0cm大)が均一に30～40%混じる。砂質分を多く含む。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりややあり。
- 51 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～2.0cm大)が均一に5～10%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P1の埋土。
- 52 10YR3/3暗褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。大小の礫が多数入る。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P2の埋土。
- 53 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～5.0cm大)が均一に少量混じる。炭化物を微量含む。粘性やや強い。しまりあり。P3の据え方。
- 54 10YR3/2黒褐色シルトににぶい黄橙色シルト塊(径0.5～2.0cm大)が均一に5～10%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P3の掘り方。

※番号は図11に対応

## 駒形 45-4 地点 土層注記

## 5 総括

本年度は、平成29年度に引き続いて、平泉野台地の東端にある平場、中川9、若井原194-1地点を調査した。また、平泉野台地にある平場の若井原194-2地点と、平泉野台地丘陵部から張り出した場所である駒形45-4地点を新たに調査した。『陸奥国骨寺村絵図』に文字で書かれる「骨寺（堂）跡」の痕跡を探ることが、調査の大きな目的である。

中川9、若井原194-1地点では、29年度調査で確認した道路遺構とみられる溝や整地層の延長を確認したいと考えていたが、確認できなかった。1トレンチでは29年度調査で確認した竪穴状遺構の全体形を把握したが、出土遺物を伴わず、新たな成果は得られていない。2トレンチでは、円形となるとみられる土坑を確認した。埋土から縄文土器が出土しており、縄文時代のフラスコ状土坑の可能性がある。

若井原194-2地点では、26年度踏査で確認した平場の高まり部分を調査したが、自然堆積による地形であり遺構ではないことを確認した。

駒形45-4地点では、3つのトレンチのうち3トレンチで年代不明の柱穴群、土坑を確認した。3トレンチの東側の水田は、昭和年代以前から低湿地であったといい、遺構が広がるとすれば西側になるとみられる。3トレンチの西側に位置する2トレンチで土壌サンプルを採取しており、今後放射性炭素年代測定を行い土層の年代を確認した上で、さらに周辺を調査する必要がある。

また1トレンチの遺構外から、9・10世紀頃のものともみられる土師器甕片が出土した。土師器の出土は、過去に要害194-1、194-2地点の調査と、若井原188地点の調査で確認しているのみである。過去に行った花粉分析の成果からも、10世紀頃から本格的な稲作が始まったとみられており、今回の土師器甕片の出土は、骨寺村の開発を考える上で重要であるといえる。

(菅原)



## 【参考文献】

- 一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 一関市教育委員会2018『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』
- 伊藤信1957「辺境在家の成立—中尊寺領陸奥国骨寺村について—」『歴史』第15号 東北史学会.
- 入間田宣夫2016「骨寺村の成立は、いつまで遡るのか—骨寺村絵図研究の過去・現在・未来（1）—」一関市博物館研究報告第19号
- 大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号.
- 黒田日出男1995「陸奥國中尊寺領骨寺村との対話—描かれた東国の村と境相論—」『描かれた荘園の世界』新人物往来社.
- 島田直明2012「Ⅲ. 骨寺村荘園遺跡の植生・植物相—特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.
- 関根達人2009「北奥の一二世紀一堂ヶ平経塚の検討—」『平泉文化研究年報』第9号 岩手県教育委員会.
- 土井宣夫2012「Ⅱ. 地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.
- 広田純一・菅原麻美2018「骨寺村荘園遺跡における田越し灌漑システムの実態と骨寺村絵図（詳細絵図）に描かれた水田の推定」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』一関市博物館
- 平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ. 一関巖美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.
- 吉田敏弘1989「骨寺村の地域像」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻 地人書房
- 吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森.

## 1. 平泉野遺跡

No.	挿図	図版	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	年代	備考
1	3-3	4-6-3	1トレンチ	表土層	石器	石匙	完形	縄文	頁岩
2			1トレンチ	クリーニング時	縄文土器	深鉢	口	縄文中期	大木8a、波状口縁、隆帯付くが文様不明
3			1トレンチ	クリーニング時	縄文土器	深鉢	頸	縄文中期	大木8a、刻み付き隆帯
4			1トレンチ	表土層	陶器	壺	胴	19C～	産地不明
5			1トレンチ	表土層	縄文土器	深鉢	胴	縄文中期	大木8a、隆帯付くが文様不明
6	3-2	4-6-1	2トレンチ	表土層	縄文土器	深鉢	胴	縄文中期	大木8a、縄文施文後に沈線により区画
7			2トレンチ	表土層	縄文土器	深鉢	口	縄文中期	大木8a、大型突起
8			2トレンチ	表土層	縄文土器	深鉢	口	縄文中期	大木8a、大型突起の一部
9			2トレンチ	表土層	縄文土器	深鉢	口付近か	縄文中期	大木8a、横位隆帯付く
10			2トレンチ	表土層	縄文土器	深鉢	胴	縄文中期	大木8a、隆帯付くが文様不明
11		4-6-2	2トレンチ	表土層	縄文土器	深鉢	口付近	縄文中期	大木8a、U字状隆帯
12		4-5-2	2トレンチ 土坑2		縄文土器	粗製深鉢	口	縄文後期	内外面にコゲ付着
13	3-1	4-5-1	2トレンチ 土坑2		縄文土器	粗製深鉢	口	縄文後期	外面にコゲ付着

## 2. 駒形45-4地点

No.	挿図	図版	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	年代	備考
1		11-8-1	1トレンチ	I層	土師器	甕	体	9・10C	外面にケズリ痕あり
2			1トレンチ	I層	土師器?	甕?	体	9・10C	外面に煤付着
3			1トレンチ	I層	磁器	皿?	体	明治～	産地不明
4			2トレンチ	図11-7層	陶器	碗	体	19C前	大堀相馬
5			2トレンチ	図11-7層	陶器	焙烙	口	19C～	産地不明
6			2トレンチ	昭和の造成攪乱土層	陶器	碗	口	19C前	大堀相馬
7			3トレンチ	昭和の造成攪乱土層	石器	スクレイパー		縄文	欠損部あり 未完成か 頁岩

表2 出土遺物観察表



1 平泉野遺跡(中川9、若井原194-1地点)調査区全景(無人航空機による空中撮影)



2 1トレンチ全景(無人航空機による空中撮影)

平泉野遺跡(1)





1 2トレンチ全景(無人航空機による空中撮影)



2 1トレンチ図5・6-AA'

平泉野遺跡(2)





1 1 トレンチ図5・6-BB'



2 2 トレンチ図5・6-CC'

平泉野遺跡(3)





1 1トレンチ縦穴状遺構3確認状況(西から、砂部分は29年度に調査した部分)



2 2トレンチ土坑2土層断面



3 1トレンチ土坑3土層断面



5 出土遺物(土坑2)



6 出土遺物(遺構外)

平泉野遺跡(4)





1 平泉野遺跡(若井原194-2地点)3トレンチ調査区全景(無人航空機による空中撮影)



2 3トレンチ高まりの地形部分の遺構確認状況(南東から)

平泉野遺跡(5)





1 3トレンチ図7・8-AA'



2 3トレンチ高まりの地形部分  
東端の土層堆積状況



3 3トレンチ溝1土層断面

平泉野遺跡(6)



1 屋敷地の北端の石祠群



2 元禄2年墓標



2 1 トレンチ全景(北西から)





1 1トレンチ全景(南東から)



2 1トレンチ西壁断面

駒形 45-4 地点(2)





1 2トレンチ全景(北西から)



2 2トレンチ図9・11-AA'

駒形 45-4 地点(3)





1 3トレンチ図10・11-EE′



2 3トレンチ図10・11-DD′

駒形 45-4 地点(4)





1 3トレンチ土坑1半裁状況



2 3トレンチ土坑1土層断面



3 3トレンチ土坑2土層断面



4 3トレンチP 2・3半裁状況



5 3トレンチP 1土層断面



6 3トレンチP 2土層断面



7 3トレンチP 3土層断面



8 出土遺物

駒形 45-4 地点(5)

# 抄 録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	骨寺村荘園遺跡確認調査報告書							
副書名	平泉野遺跡・駒形45-4地点							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第27集							
編著者名	菅原孝明・二階堂里絵							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8503 一関市竹山町7-5 TEL 0191-26-0820							
発行年月日	2019年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほねでらむらしょうえん 骨寺村荘園	いちのせきし げんびちようあざ 一関市 巖美町字 こまがた 駒形45-4	03209	NE72- 2283	38°58'33"	140°57'31"	20181018 ～ 20181126	177m <sup>2</sup>	確認調査
へいせんの 平泉野	いちのせきし げんびちようあざ 一関市 巖美町字 なかがわ あざわか いはら 中川9、字若井原 194-1、194-2	03209	NE72- 2197	38°58'43"	140°56'21"	20180626 ～ 20181126	386m <sup>2</sup>	確認調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
骨寺村荘園	荘園	縄文、中世、近世	土坑、柱穴	石器、土師器、陶磁器				
平泉野	散布地	縄文、近世	竪穴状遺構、土坑	縄文土器、石器、陶器				
要約	<p>本年度は、平泉野遺跡のうち①中川9、若井原194-1地点、②若井原194-2地点、骨寺村荘園遺跡のうち駒形45-4地点を調査した。中川9、若井原194-1地点では、29年度調査で確認した道路遺構とみられる溝や整地層の延長を確認したいと考えていたが、確認できなかった。2トレンチでは、縄文時代のフラスコ状土坑を確認した。若井原194-2地点では、26年度踏査で確認した平場の高まり部分が、自然堆積による地形であることを確認した。駒形45-4地点では、3トレンチで年代不明の柱穴群、土坑を確認した。また1トレンチの遺構外から、9・10世紀頃のものと思われる土師器甕片が出土した。</p>							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集

## 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

平泉野遺跡・駒形45-4地点

発行 平成31年3月22日

発行・編集 一関市教育委員会  
〒021-8503  
岩手県一関市竹山町7-5  
電話 (0191) 26-0820

印刷 川嶋印刷株式会社  
〒029-4194  
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21  
電話 (0191) 46-4161(代)